=市史編さん便り=　【14 号】　令和 5 年 6 月 19 日(月)発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

土佐清水市の民俗伝承(2)　「バラ抜き節」

市史編集委員　岩井　拓史

近世前期、紀州国（現在の和歌山県全域と三重県南部）の印南浦海民が清水の鼻前七浦に進出してから、カツオ漁と節加工が本格的に始まった。「鼻前七浦」とは、足摺半島南端から半島西部にかけて位置する浦々の総称で、現在の足摺岬・松尾・大浜・中浜・清水・越・養老を指す（清水七浦ともいう）。近世中期からは空前のカツオ漁景気に沸き、天保 11 年（1840）の年間カツオ漁獲尾数は 50 万尾を超えた。このような好景気の中で、中浜を拠点とする山城屋などの廻船商人が隆盛を極めた。山城屋一族は、本家・分家それぞれがカツオ船と「納屋」といわれる加工場を所有し、節加工に励んだ。

節づくりの工程では、良質なものに仕上げるために「バラ」といわれる魚の小骨を抜く手作業が必要で、漁村女性たちの主要な就労手段であった。納屋での作業は、カツオ船が港に着いた夕刻から始まり、夜半に及ぶことが日常茶飯事であった。黙々とバラを抜いても作業能率は上がらない。「バラ抜き節」は、作業に従事する女性たちが眠気覚ましと士気高揚のために唄った民謡である。

400 年近く前に長崎の五島から伝えられたとされ、曲節は「ヨイヤノ節」（またはヨショヤレ節）と「ヨイヨイ節」（またはハイカラ節）があり、歌詞は当時 100 を超えたといわれる。歌詞には「臼碆」や「納屋」など、ふるさとの自然や漁労が散りばめられており、当時の浦々の生活や心情を察することができる。

昭和 36 年（1961）11 月 13 日、本市の文化財に指定された（現在に至るまで本市唯一の無形文化財である）。民謡のみが指定されたのは、高知県内で初めてのことであった。その後、森尾光子をはじめとする市内の有志により振り付けが完成、唄と踊りで構成する郷土民踊として生まれ変わり、各地の盆踊りなどで踊り継がれてきた。

踊りの特徴として、左足の前に右足を出し、やや円心向きに両手を握り、顔の高さで交差して両手を開く動作や、全身を使って荒波を表す動作などがある。昭和 56 年には国民的歌手･森昌子が、竜串千畳敷で踊り子を背後にバラ抜き節を唄うＮＨＫ番組が放送された。同年の『広報とさしみず』10 月号の市民紹介コーナーでは、バラ抜きに従事した東川政恵（戎町・当時 98 歳）が過去を回想しており、当時の様子を知ることができる。

女工たちの唄声が谷筋にこだまし、自然と活気づく集落。バラ抜き節は、鼻前に生きた女性たちの魂の唄であり、大きな歴史的・民俗的価値を具備している。

保存会の誕生

機械技術の発達や昭和 30 年頃から宗田ガツオ（マルソウダ）が主流になったことで、当時のような工程ではなくなり、唄われる機会が激減した。そこで、ふるさとの唄と踊りを後世に残そうと、久松治幸（寿町・故人）を中心に保存会結成の気運が高まり、平成 25 年（2013）11 月 28 日に幸町の中央公民館で第 1 回準備会が開催された。翌 26 年 1 月 22 日に第 2 回準備会を開催、同年 4 月 1 日に発足し、保存会活動が始まった。27 年 4 月には公民館サークルとして認定されている。同年六月、静岡県熱海市で開催された「第五十五回全国日本民踊講習会」に保存会が招かれ、全国の指導者たちを前に哀調を帯びた唄と踊りを披露した。この様子は公益財団法人日本フォークダンス連盟監修のＣＤ・ＤＶＤ『ふる里の民踊第 55 集』に収録されている。

納屋に響いていたバラ抜き節を後世に伝えるべく、現在二十二名の会員が本市の海をイメージした鮮やかな青色の衣装をまとい、継承活動に励んでいる。

土佐清水バラ抜き節保存会
代表　　弘畑　眞百合
会員 22 名（令和 3 年 4 月 1 日時点）

「真念庵の物語⑵」　寒川金兵衛位牌と寄進の仏飼田

真念庵の堂舎内には「寒川金兵衛二親位牌」（下左写真参照）がある。讃州（香川県）出身の寒川金兵衛が両親の供養のためこの位牌を庵に預けたものである。彼は集落北部の石神の前に所在する仏飼田（水田十二代・72 坪）を庵に寄進している（下右写真参照）。この水田は、現在も地区によって大切に管理されている。地域と遍路文化の歴史を感じさせるエピソードの一つである。